

生態系での環境認識論の研究

SENKICHI SHIBUYA

人間自然学研究所

1952年、生物と環境は一体となって一つ生態系を構成している環境観がW.D.Billingsによって提案された。主体あつての環境という認識は、「主体-環境系」の生命概念に発展し、細胞を生命の単位とする従来の生命の定義を拡張する必要を示唆している。生物にとって環境とは、その生物が認識しうるものである。環境から環境主体への作用は環境作用と呼び、逆に環境主体から環境への作用は環境形成作用と呼ばれ、環境も環境主体と同様に潜在的に能動性を具備していることを意味している。

生態系を形成している環境を認識し、観測するために西歐的認識方法によれば、観測者はその環境の外部から客観的に認識することになるので、環境主体と別に観測者を立てることになるが、この認識構造では無限後退論理により破綻する。破綻を救うために環境主体が観測者となり生態系の環境を認識することにする。人間-生態系即ち人間生態系を研究すると、認識する人間も認識される環境も共に流動的であり、「動きつつあるもの」として認識しなければならず非線形現象を認識することになる。カメラモデルの知覚論と見合う形で「外的対象—心的内容—意識作用」という三項図式で広松渉が紹介している間接的近代認識論の構図では説明不可能である。

更に、生態系では、主体が能動的に環境形成作用する場合だけでなく、環境も能動的になり主体に環境作用する場合もあるので、主体と環境の機能が逆転する場合も説明できる認識論でなければならないという問題もある。この逆転問題を解決するには、環境は受動的であるだけでなく、条件により環境主体と同様に能動的になる機能も備わっていなければならないのでこれを仮説として導入する。この仮説は、感覚的認識をする場合、自我は受動的自我となり、悟性的認識をする場合は能動的自我へと逆転することが知られているので、環境にもその機能を拡張して受動性だけでなく能動性を具することは仏法哲学では容易に受け入れられることである。環境が能動的に環境作用するので、他者も環境に含ませることも可能になるので他者認識も環境認識として扱うこともできるだろう。

以上の準備を基に、生態系での環境を認識するために、環境の六境（色境・声境・香境・味境・触境・法境）が環境主体の六根（眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根）に触れ共鳴して六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）が直接的に環境認識として得られる。環境主体は行為者でもあり環境に働きかけ環境からの情報に共鳴する強弱により認識する生態系での環境認識構図を共鳴認識論と呼び、ギブソン認識論との相違点も指摘する。

参考文献

渋谷仙吉：人間科学における対話的観測方法、山形大学紀要（人文科学），vol.15, no. 4, p.215-p.229, 2005年。

渋谷仙吉・渋谷幸一：ユクスキュル環境論と仏教的環境論の比較考察、地球システム倫理学会会報、vol.3, p.87 - p.101, 2008年。